

■ Culture

日本霊異記にみる「現代」

古代・伝承文学研究者の三浦佑之・千葉大名誉教授(78)の写真だが、「口語訳 日本霊異記」(KADOKAWA)を刊行した。日本最古の仏教説話集は、「描かれる人間や社会の中に現代が垣間見える」と魅力を語る。

「日本霊異記」は、奈良・薬師寺の僧・景戒が編纂し、平安時代初期に成立した。主に7〜8世紀のこととして語られるおよそ120の説話を収め、善行も悪行も現世で報いを受けることを説く。

「古事記を古老の語りとして訳した「口語訳 古事記」を2002年に刊行した。今回それ以来の口語訳を採用した。漢文の文語体を「不思議な出来事であり

千葉大名誉教授 三浦佑之さんが口語訳版



まず「これこそ、不思議の第一であります」と、語りかけるように訳した。「『霊異記』が収める話は、修行僧が全国を回って集め、説教など語りの場にあった話だったはず」だからだ。

同じ時代を記しているも、正史「続日本紀」は堅い政治史、「万葉集」は庶民の歌も収めるが基本は貴族文学だ。一方「霊異記」は「庶民の泥臭い生活や苦渋に満ちた心など、普通人々の暮らしを生々しく描

き出している」と語る。

亀やカニの恩返しがあり、盗みの代償で牛に生まれ変わった男がいる。行基や道鏡のような有名人も登場するが、どこまで実話か怪しくもある。「今で言えれば週刊誌。本当かうそかのはざまを本当らしく語る。うそのようで本当のことを書いた週刊誌記事と同じで、事実の部分はかなりあるはず」。核家族化や高齢者虐待など今日に通じる物語もある。

「説話が語り継がれたのは、何かしらの共感を得ていたから。貴族の生活の物語より、よほど古代がわかって面白い」。懸命に生きた庶民の声が、行間から聞こえるようだ。(清岡央)